様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１８４８６

研究課題名（和文）インクルーシブ教育理論から優秀児の教育的支援を展望する萌芽的研究

研究課題名（英文）Research on Educational Support for Gifted from Inclusive Education Theory

研究代表者
石田　祥代（Ishida, Sachiyo）

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：３０３３７８５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではインクルーシブ教育の理念は学校で困難を抱える優秀児にとっても機能するかを学術的問いとし、基礎研究としての優秀児概念の検討と日本の小学校で優秀児が抱える教育的課題の分析を行った。包摂的かつ公平で質の高い教育を提供するための教育的ニーズの多様性を包含する範囲を拡大するプロセスとしてのインクルーシブ教育理念は優秀児にとっても機能するものの、そのシステムは日本では構築の途上にあることが示された。
英国ではSENの枠組みで支援が捉えられ、デンマークでは校内にパートタイム支援を設けていた。他方で、ノルウェー、スウェーデンやフィンランドでは学校の裁量に任されており、研究の蓄積が喫緊の課題であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
多くの学校や関係機関において、適切な指導や支援の対象者は「障害を有する」児童が想定され、学校や学級に適応できるよう当該児の長所を伸ばし欠点を補う、または、不足する知識や技能を身につける補充プログラムが中心である。しかし、優れた能力を一層伸ばす向上プログラムをシステムに含むことでインクルーシブ教育がさらに推進されることが示唆された。本研究では、優秀児教育をインクルーシブ教育理念のなかで国内外の研究者らと議論し検証することを通して、教育システムの制度設計を再検討することができた。また、特別支援教育学をベースとしながらも、発達心理学や社会福祉学を活用したことで学際的に研究課題にアプローチできた。

研究成果の概要（英文）：The academic question in this study was whether the inclusive educational idea can work for the excellent children who have difficulties in school, and the concept of the excellent child was examined as a basic research and the educational challenges faced by excellent children in Japanese primary schools were analysed. Through the research, the inclusive idea as a process of expanding the scope to include the diversity of educational needs in order to provide an inclusive, equitable and high quality education works for children of excellence, but the system is still under construction in Japan.
In the UK, support was captured within the framework of SEN, and in Denmark, support groups and courses were established within primary schools. On the other hand, in Norway, Sweden and Finland, it was left to the discretion of the school and the accumulation of research was an urgent issue.

研究分野：特別支援教育学

キーワード：優秀児　インクルーシブ教育　ギフテッド　イギリス　スウェーデン　デンマーク　ノルウェー　フィンランド

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

北欧では、行政改革を通して教育予算や実行責任を含む教育権限が自治体と学校に大幅に移譲された結果、全国水準を保ちながらも地域や学校の特性を反映した教育を展開し、義務教育課程では教職員と保護者の意識改革、校内体制の見直しや学校中心のネットワーク構築などを通し、特別支援教育に加え心理的・福祉的諸課題にアプローチできる支援体制（基盤Ｃ【代表】石田 15K04573）を個の多様性に基づいて多層的に整備してきた（基盤Ｃ【代表】是永 26381327)。一方、後期中等教育におけるインクルーシブ教育システムは構築途上であるが、若年者への教育保障に加え就労支援や福祉支援が加わった重層的なシステムが必要であることが示唆されている（基盤Ｂ【代表】石田 19H01698)。このようにインクルーシブ教育が推進されるなか、ラベリングを回避しつつ特別な支援を行うため、移民や優秀児も考慮した個に応じた指導実践が展開されており、いじめや不登校、養育環境に恵まれない家庭も含め、自治体と役割分担をしつつ学校教育が行われている（基盤Ｃ【代表】是永 18K02793)。このような中、優秀児への教育的支援については、ギフテッドプログラムを運用するデンマーク、私立校でのユニークな教育が結果として優秀児を集めているスウェーデン、教科をこえた教育課程におけるプロジェクト型授業で優秀児の個性を伸ばすフィンランド、特別学校を持たず義務教育学校で多様な教育的ニーズに対応するノルウェー、特別ニーズ教育を活用し優秀児の個別のニーズに対応するイギリスなど優秀児への具体的な支援過程は異なる 。だが、先行研究においても申請者らの従来の研究においてもインクルーシブ教育理念と優秀児への教育実践間の理論分析は不足していた。

２．研究の目的

インクルーシブ教育の理念は学校で困難を抱える優秀児にとっても機能するかを学術的問いとし、基礎研究としての優秀児概念の検討と日本の小学校で優秀児が抱える教育的課題の分析を行う。同時に、インクルーシブ教育が実践に結びついている北ヨーロッパにおける優秀児への支援システムの知見から、優秀児への教育的支援の展望を提言する。

３．研究の方法

学校で困難を抱える優秀児の支援について、本研究では、フォーマルな資源（公的制度や公的機関が関与するサービスや人材）のみならずインフォーマルな資源（フォーマルな資源以外)、さらには資源開発（資源の整備や新制度導入）の側面から、実践ならびに理念との関係性を多角的に分析する。COVID-19 の影響を最小限にするため研究期間を３年間活用する。現地渡航に支障がなければ初年度に北ヨーロッパでのフィールド調査を実施するが、影響が継続し渡航が困難な場合、研究協力者や現地コーディネーターの協力を得て同時双方向型オンライン調査や、研究協力者による聞き取り調査で代替する。日本における聞き取り調査もこれに準ずる。加えて、申請年度に合同研究チーム内のオンライン体制の強化、先行研究レビュー、予備調査を行う。

(3) 研究１　日本の小学校で困難を抱える優秀児の教育的課題は何か

課題：日本の小学校で優秀児が抱える困難と、誰がどのように対応しているのかを整理する

方法：先行研究、自治体報告書等の分析による文献研究

学校教職員、医療・療育機関職員、民間教育職員、保護者等への聞き取り調査

(4) 研究２　北ヨーロッパにおいて優秀児への教育的支援はどのように行われているか

課題：北ヨーロッパの小学校における優秀児への支援システム・教育プログラムを明らかにする

方法：先行研究、法令、各国教育機関の資料、基礎自治体の報告書等の分析による文献調査
政府担当者、教育心理センター、教員、当事者等への聞き取り調査

(5) 研究３　インクルーシブ教育の理念は学校で困難を抱える優秀児にとっても機能するか

課題：インクルーシブ教育の理念の観点から優秀児への教育的支援の在り方を展望する

方法：インターナショナルワークショップ、学会大会での発表等

４．研究成果

(1) 優秀児やギフテッドの定義について

ギフテッドという用語の定義は、ギフテッド教育の制度やしくみを公的に整えている国や、その国の州あるいは地方自治体による定義と、ギフテッドの育成や保護を行う協会等による定義がある。アメリカ初等中等教育法（Elementary and Secondary Education Act　of 1965: ESEA）の 1978 年改正では、「ギフテッド・タレンテッドは、知能、創造性、特定の学問、リーダーシップ、芸術の領域で優れた遂行能力の根拠を示す顕在的・潜在的な能力をもち、ふつう学校で提供されないサービス・活動を必要とする」 と規定され、全米小児ギフテッド協会（National Association for Gifted Children：NAGC）ではギフテッドを「一つか複数の分野：数学や音楽や言語、絵画、ダンス、スポーツ等で、高いレベルの才能を示す子ども」と定義づける。そして、その特徴として①物覚えが良い、②記憶力が良い、③語彙が通常以上に豊富で複雑な文章を構成できる、④数字遊びやパズルをはじめ、問題を解くのが好き、⑤深く、激しい感情や反応を表す、⑥物事に過敏に反応する、⑦幼少期から理想や正義感を持っている、⑧注意力や集中力が長く続く、⑨自分の考えに浸るなど、妄想傾向がある、⑩人に探りを入れるような質問をする、⑪いろいろな方法を試して実験することに興味がある、⑫鋭い、変わったユーモアセンスを持っている、⑬ゲーム的思考や複雑な構図で、人や物を系統立てたがる、⑭鮮明な創造ができる（幼児期に空想の友だちをつくる）を示している。一方、オーストラリアでは、2004 年制定の教育法（Education Act　2004）の「全ての子どもが質の高い教育を受ける権利」を前提に、2013 年告示のナショナルカリキュラムで「才能のある子どもは、教育課程から、個々の学習ニーズ、強み、興味、目標に沿った適切で魅力的な学習機会を得る権利がある」と言及する。オーストラリア政府による才能のある子どもの定義では、成績評価の上位 10％を想定しており、教育的支援対象に幅をもたせた定義を採用している。全豪ギフテッド・タレンテッド教育協会（Australian Association for the Education of Gifted and Talented：AAEGT）では、ギフテッドやタレンテッドの定義は一つでないとしながらも、オーストラリア政府と同様に Gagné モデルでギフテッドを説明する。

デンマークにおいてはギフテッドとは通常 IQ130 以上（全子どもの 2％）の子どもを指し、「特別な支援を必要とする子ども」として IQ120 以上（全子どもの 5％）の子どももギフテッド教育の対象になることがある。また自治体によっては、上位 10～15％特別な教育の対象としていた。

我が国でギフテッドをどう定義するかは議論が分かれるところであり、ギフテッドは病気ではないため診療基準は存在しないため、IQ130 を目安で考えられることが多い。日本ギフティッド協会においても、ギフティッドの定義は一つでないとし、上述の全米小児ギフテッド協会（NAGC）の定義を紹介しているものの、本協会独自の定義は示してはいない。日本ギフティッド協会では、ギフティッド教育普及とネットワーク構築を理念として掲げ、ギフティッド 10 の権利：①一つ

以上のギフトを探求する、②子ども時代を楽しむ、③毎日、新しい事を学ぶ、④色々な人々やグループと関わりを持つ、⑤勉強だけでなく、ソーシャルエモーショナル（感情知性）スキルを学ぶ、⑥自信を持って才能を共有する、⑦新しい自分に会えるチャレンジをする、⑧全てにおいて才能がなくても良い、⑨「賢くても良い」安全な環境にいる、⑩生涯を通して、魅力を探求する、を提起する 。

2021（令和３）年６月に文部科学省初等中等局長の下に設置された「特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議」は、ギフテッドという用語を用いず、同年齢の中で、知能や創造性、芸術、運動、特定の学問の能力（教科ごとの学力等）等において一定以上の能力を示す者で特異な才能と学習困難とを併せ有する児童生徒として「得意な才能のある児童生徒」と呼称している。

(2) 日本の小学校で困難を抱える優秀児の教育的課題は何か

ギフテッドの特性で代表的なものは、非同期発達と過興奮性の２つで、いずれも小学校では困難となり得る。非同期発達は認知能力の中の偏りや、認知能力と社会性の不一致、周りのことの発達の差である。また、過興奮性は、あらゆる面でとにかく興奮しやすいという特性である。知的な興奮であれば知的好奇心になるが、興奮し過ぎて夜の寝付きが悪くなり、結果として学校生活に支障をきたしたり、癇癪や感覚過敏なども挙げられる。

当事者の困難としては、自分を理解してくれる人の少なさがある。他の子どもたちと価値観が異なることから話が合わず、学校の中で孤独感を増し、定期的に癇癪を起こし、うつ状態に陥ることもある。

また特に低学年では、基礎力重視の学習内容への抵抗感や、同学年児との差に加え、優秀児自身の情緒の抑制が発達途上にあり、学級や学校に適応しづらい事例は少なくなく、このような状況は国際的に共通の教育的課題でもある。学校に不適応になる優秀児の背景は複雑で色々な要因が混在していることが多く、そもそも優秀性を診断する機会は問題を抱えて医療機関や相談期間を訪れる子どもに限定されているため、特異的に優秀かどうかという観点からの議論は少ない。一方で、優秀な子どものなかには、学校生活に適応し、発達のバランスが良い事例や自分にあった中学校や高校への進学で学校に適応できた事例もある。また、入試のある小・中学校や優秀児集住地の小・中学校では適応できない事例が少ないという実態もある。

(3) 北ヨーロッパにおいて優秀児への教育的支援はどのように行われているか

デンマークにおけるギフテッド児への介入方法は通常学級における個別／集団単位の介入、パートタイムの介入、サマースクール、特別学級、特別学校などが検討されたが、総合的にはギフテッドを直接対象としたパートタイムの介入が、学力向上と情緒的安定に最も効果をもたらすことが示唆され、同国では 2024/25 年度から、ギフテッドのスクリーニングのためのチェックリスト活用を目指している。また、2022 年に北欧ギフテッド教育ネットワークがプロジェクトとして設立され、研究交流に加え、スウェーデンとフィンランドの大学間連携で５年間のプロジェクトとしてギフテッド教育博士課程が設置された。

イングランドにおいては、ギフテッドの子どもたちに対する特別なプログラムが提供されたり、教員向けの研修開発など、いわばギフテッドの子どもたちに焦点を当てた様々な取り組みがなされてきた。もちろんギフテッドの子どもたちへの教育を充実させることで、すべての子どもたちにとってのメリットをもたらすものであると考えられていたが、焦点化された取り組みであったことは間違いない。しかし、結果としてギフテッドの子どもたちに焦点を当てたプログラムは廃止され、学校教育の改革による包摂が進められていった。すなわち、学校教育におけるインクルージョンの文脈にギフテッドの子どもたちの教育も回収されていったと捉えることがで

きるだろう。スコットランドでは議会発足以降ギフテッドの子どもたちに対する教育はインクルーシブ教育の一環として行われてきた。具体的には、ASN の一つとして「よくできる子ども」が挙げられており、こうしたニーズに応答することが各学校に求められていた。学校は上級学年の授業に参加したり、学級編成そのものを変更したりしてそのニーズに応答しようとしていた。

(4) インクルーシブ教育の理念は学校で困難を抱える優秀児にとっても機能するか

本研究を通して、包摂的かつ公平で質の高い教育を提供するための教育的ニーズの多様性を包含する範囲を拡大するプロセスとしてのインクルーシブ教育理念は優秀児にとっても機能するものの、そのシステムは日本では構築の途上にあることが明らかとなった。また、インクルーシブ教育の文脈において、学校で困難を抱える優秀児の二次障害予防は重要であり、スウェーデンでは社会的損失としてドロップアウトの危険性が指摘されている。

そして、日本よりも先んじてギフテッドの子どもたちの教育に取り組んできた地域の実践から得られる示唆とは何か。第一にインクルーシブ教育を従来の特別支援教育の文脈として捉えるのではなく、より広範囲の子どもたちの権利保障を志向するものとして捉えることである。日本におけるインクルーシブ教育が想定している対象の問題としても言い換えることができる。すでに多くの研究で指摘されているように、日本のインクルーシブ教育はサラマンカ宣言で提唱されているインクルーシブ教育と比較してその対象を障害児に限っており狭窄的と言わざるを得ない状況にある。しかしながら、優秀児やギフテッドの子どもたちをはじめ学校現場で困難を抱えている子どもたちが障害児に限られないことは明白である。

第二に学校の自律性を保証しそれぞれの文脈に応じた学校改革を推進することである。たとえば、フィンランドではギフテッドのためのプログラムはないものの、上の学年の授業に参加したり、特別教育教員が取り出し授業を行う実践が行われていた。また、スウェーデンでは中学と高校が連携し、中学に高校教師が来て授業を行ったり、高校の授業に中学生が参加するなどの実践がなされていた。これらはいずれも学校の裁量で行われており、教育現場からは研究の蓄積が求められていた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 石田祥代	４．巻 44(4)
２．論文標題 特別な教育的ニーズのある優秀児とその教育的支援に関する動向	５．発行年 2023年
３．雑誌名 発達障害研究	６．最初と最後の頁 323-333
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中道圭人・高橋実里・杉田克生	４．巻 44(4)
２．論文標題 就学前におけるギフテッドのスクリーニングの可能性の検討	５．発行年 2023年
３．雑誌名 発達障害研究	６．最初と最後の頁 334-343
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 是永かな子	４．巻 44(4)
２．論文標題 デンマークにおけるギフテッド教育―ギフテッドの定義やニーズ、早期発見、介入方法―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 発達障害研究	６．最初と最後の頁 354-367
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中西美裕・伊藤駿	４．巻 29(1)
２．論文標題 知的ギフテッド児の保護者が抱える困難：10名への聞き取り調査から	５．発行年 2023年
３．雑誌名 SNEジャーナル	６．最初と最後の頁 126-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊藤駿	4．巻 44(4)
2．論文標題 イギリスにおけるギフテッドの子どもたちに対する教育	5．発行年 2023年
3．雑誌名 発達障害研究	6．最初と最後の頁 368-376
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡部茉央・是永かな子・岩城裕之・田村康忠・松本直子	4．巻 5
2．論文標題 中学校の国語科に注目した授業のユニバーサルデザインの実践―授業参加促進と学力向上およびギフテッドの生徒の学習保障に注目して―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 高知大学学校教育研究	6．最初と最後の頁 193-200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 村上詩織・伊藤駿	4．巻 13
2．論文標題 ギフテッドの子ども支援に関する研究動向と課題－かれらが抱える困難さとその支援方策に着目して－	5．発行年 2023年
3．雑誌名 子ども学論集	6．最初と最後の頁 00-00
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Nakamichi Naoko、Nakamichi Keito、Nakazawa Jun	4．巻 191(2)
2．論文標題 Examining the indirect effects of kindergarteners’ executive functions on their academic achievement in the middle grades of elementary school	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Early Child Development and Care	6．最初と最後の頁 1～14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/03004430.2021.1913135	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中道圭人･中道直子･中澤 潤	4．巻 70
2．論文標題 幼児におけるネガティブ刺激への情動的反応，心の理論，仲間関係の関連	5．発行年 2022年
3．雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6．最初と最後の頁 127～133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 是永かな子・石田祥代	4．巻 82
2．論文標題 スウェーデンにおけるインクルーシブ教育の観点に基づく優秀児の教育的支援	5．発行年 2022年
3．雑誌名 高知大学教育学部研究報告	6．最初と最後の頁 149～155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 竹村三枝・是永かな子・澳本典子・三野和香子・大谷俊彦	4．巻 4
2．論文標題 不登校対応としての中学校校内適応指導教室の可能性	5．発行年 2022年
3．雑誌名 高知大学学校教育研究	6．最初と最後の頁 111～122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 特別な支援が必要な生徒に対する小規模中学校におけるチーム支援体制づくり	4．巻 4
2．論文標題 古味梢・是永かな子	5．発行年 2022年
3．雑誌名 高知大学学校教育研究	6．最初と最後の頁 199～205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 廣瀬空・近藤修史・是永かな子
2．発表標題 小学校における算数科授業ユニバーサルデザイン―段階的支援を考慮した一斉指導―
3．学会等名 日本LD学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 是永かな子
2．発表標題 日本におけるギフテッド支援が有効な当事者及び関係者への聞き取り調査―デンマークやスウェーデンの取り組みも念頭に―
3．学会等名 日本LD学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 中西美裕・村上詩織・伊藤駿
2．発表標題 ギフテッドの子どもが学校で抱える困難とその対応に関する研究
3．学会等名 日本特別ニーズ教育学会第28回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 村上詩織・伊藤 駿・ 佐藤駿一
2．発表標題 ギフテッド傾向の子どもへのオンライン空間を用いた支援の検討
3．学会等名 日本教育工学会2022年秋季全国大会
4．発表年 2022年

１．発表者名 Shun Ito, Shiori Murakami, Shunichi Sato
２．発表標題 The Research for Supporting Gifted and Talented Pupils in Metaverse
３．学会等名 WCCE2022（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計2件

１．著者名 石田　祥代、是永　かな子、眞城　知己	４．発行年 2021年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 240
３．書名 インクルーシブな学校をつくる	

１．著者名 中道　圭人（中澤　潤編）	４．発行年 2022年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 232
３．書名 よくわかる教育心理学［第２版］	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	是永　かな子 (Korenaga Kanako) (90380302)	高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・教授 (16401)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中道　圭人 (Nakmichi Keito) (70454303)	千葉大学・教育学部・准教授 (12501)	
研究分担者	伊藤　駿 (Ito Shun) (90883695)	広島文化学園大学・学芸学部・講師 (35412)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ノルウェー	インランド応用科学大学			
英国	ダンディー大学	ロンドン大学		
スウェーデン	イェーテボリ大学			
デンマーク	南デンマーク大学			
フィンランド	ユバスキュラ大学	ラップランド大学		